
けいおん! 俺の奏でる音

icbb

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！ 俺の奏でる音

【Nコード】

N8594Z

【作者名】

icbb

【あらすじ】

初めての執筆です。生暖かい目でみてやってください

第零話

けいおんの二次小説です

初めての執筆で悪い文章ですが、意見、感想のほどよろしく願います

なるべく頻繁に更新をしていくつもりなので、よろしく願います

主人公、天城空也。共学になった桜ヶ丘高校に入学することになり、唯たちとは同級生。漣や律とは中学からの知り合いであり、小さい時からギターを弾いていた。実力はプロになる一歩手前

主人公の幼馴染、不動大地。空也と共に桜ヶ丘高校に入学した幼馴染、空也からは煙たがられてはいるが空也も信頼する親友。もちろん漣や律とも知り合いである

以上がオリキャラの簡単なプロフィールです。完全見切り発車ですのでご了承を

第零話（後書き）

次の話より本編です

第一話

四月某日…

「こんな感じか？」

桜ヶ丘高校の制服であるブレザーに袖を通し姿見で確認する

「まあ…そのうち慣れるだろ」

自己完結し、俺の部屋から出た

「あら、おはよう。空也」

母さんが笑顔で出迎え、俺の前に朝食をおき、顔を俺に向けてきた

「あんた、何か部活するの？」

「さあ？」

曖昧な返事をし朝食を食べ、鞆を担いだ

「じゃ、いつてくる」

言葉少なめに家を出た。しばらく歩いていると後方から面倒な存在がやって来た

「おーーーーーう、元気か？空也！！」

「お前が来なきゃ元気だ…」

大地に暴言を浴びせ、無言で歩みを進める

「お前は毎回ひどいな…」

大地はそう言いながらもしっかりついてきた。そして学校に近づくとつれて桜ヶ丘高校の生徒が多くなっていった

「女子ばかりだ…」

「うひょー！ハーレムだ！！！！！」

「黙れ…」

大地の腹部にパンチをいれ気絶させクラス表を見にいった

天城空也……平沢唯……不動大地……真鍋和

「何であいつと一緒になんだよ…」

ため息をついて教室に向かった…

入学式を終え、一人一人自己紹介をしていく

「天城空也あまぎくうやです。よろしく…」

簡単に自己紹介を終わらせ、部活の勧誘チラシがある掲示板に向かった

「うーん…めぼしい部活はねえ…か…」

踵を返し教室に戻って返す支度をしていると大地がやってきた

「空也ー帰ろうぜー」

「……………」

それを無視し昇降口に歩いていったそこに漣と律がいた

「あ！空也！」

「ホントだ。クウじゃん」

俺を呼び捨てで呼ぶのは秋山漣、クウとあだ名で呼ぶのは田井中律。二人とも俺の中学からの友達である

「よう、二人とも。今帰りか？」

「ああ、空也も？」

漣の言葉に俺は小さく頷いた

「じゃあ一緒に帰ろうぜー」

律の言葉に頷いたのは俺ではなく大地だった

「俺も一緒に帰るー！……………くはあー！」

大地の腹部に蹴りをいれ俺は歩き出した

「空也と不動は高校に行っても相変わらずだな…」

漣が呟き俺に着いてきた

「漣はどうなんだ？」

「ん？何が？」

「人見知り…俺と大地以外の男と喋れる様になれそうか？」

漣は少しあせった表情をみせた

「まだ厳しそうだな、頑張れ」

「うん…やっぱり空也には分かつちゃうか…」

漣は苦笑いを浮かべた。それから談笑しながら帰路についた

第二話

桜ヶ丘高校に入学して2週間がたった

「空也ー、お前部活何に入るんだ？」

購買から帰ってきた大地が言ってきた

「まだ何も決めてねえよ」

俺の言葉に大地が驚いていた

「なんだと！お前…和ちゃんが言ってたぞ。部活をしない奴は二トだつて！」

「また極端だな。そういうお前は？」

「俺か？俺はテニス部だ」

「お前如きがテニスだと？」

「酷い言われようだな。ちゃんとした理由があるのだよ！」

大地は意気揚々と立ち上がった

「この学校は元々女子高！つまり…「言いてえ事は分かったととりあえず黙れ」ヒドッ！」

大地の言葉を遮り、昼食を手早く済ませた

「そついやお前…軽音部入らねえの？」

「軽音部？」

「ああ。さつき張り紙が有ったぞ？興味があるなら行ってみるよ」

「そつだな…」

言葉少なげに頷き、午後の授業が始まるまで軽音部について考えていた

その日の放課後…

「この先ね…」

山中教諭に部室の場所を聞き、音楽準備室に向かうが一人の少女を発見した

「平沢……だっけ？何してんの？こんなところで？」

「えっと……誰でしたっけ？」

少女は頭をかきながら聞いてきた

「天城空也。一応お前と同じクラスだ」

「そうだった。空也だからクーくんだね！」

「好きに呼べ。んで？何してんの？」

「あ！クーくん一緒に音楽室に来て！」

「何で？」

話を聞くと軽音部に入部したようだが、バンドを組んでもギターができないと理由でやめたいとの事だった

「んじゃ…何ならできるんだ？」

「えっと…カスタネット？」

俺の中で想像しているととても似合っていた

「はあ…まあいい、行くぞ」

俺は平沢を連れて音楽準備室に向かった

「うーん…」

音楽準備室につくと平沢はドアを開くのに躊躇っていた

「ほら、早く入れよ。入部断るんだろ？」

「う、うん…でも…」

まだ入るのを躊躇っていた

「はあ…」

俺は平沢の前に立ち、変わりに音楽準備室のドアを開けた

「ってあれ？ 澪と律じゃん」

そこには澪と律、そして初対面の女子がティータイムをしていた

「空也？ 何でこんなところに？」

「俺は軽音部員を連れてきただけだ」

俺は背中にいた平沢を前に押し出した

「貴方が平沢唯さん？」

「は、はい！」

「入部希望の？」

「は、はい！」

律と澪が平沢を質問攻めにする

「ありがとうー！ ギターがすごく上手いんだよね！ 平沢さんみたいな人に入ってもらって心強いよ！」

律が平沢の両手をつかんでブンブン振っていた

「尾ひれが付いちゃってんな…どうする気だ？」

みんなに聞かれない程度に呟いた

「平沢さんはどんな音楽がやりたいの？好きなバンドは？好きなギタリストは？」

律が質問で攻め立てる

「じ…じ…」

澪がじから始まるギタリストを上げていき遂に平沢は黙ってしまった。実は入部を辞めさせてくださいを言いたいだけなのに…仕方ない…

「澪も律も落ち着け、平沢がお前らに話したいことがあるから来たんだ」

「「え？」」

澪と律、それにムギと呼ばれた少女も一斉に平沢を見た

「ほら、頑張れ」

平沢の背中をポンと押した

「クーくん…あの、実は入部を辞めさせてください！」

平沢の言葉に三人が固まった

「ギターは弾けないし、もっと違う楽器をやるんだと思って…」

「じゃあ何ならできるの？」

「カスタ……ハーモニカ！」

見栄を張ったのが間違이었다

「あ、それなら持つてるよ！吹いてみて」

律が持っていたのだった

「ごめんなさい！吹けません！」

凄い速さで平沢が謝罪した

「でも、入部しようとしたってことは音楽に興味があるんだよね？」

漣のフォローを皮切りに三人がなんとか入部させようと頑張っていた。お菓子で餌付けしてみたり、他に入りたい部活がないなら誘ってみたり、すると平沢は申し訳なさそうに泣いてしまった

「ごめんなさい、軽い気持ちで入部するなんて言うてしまったばかりに……」

こうなってしまうたら平沢を留まらせるためには……

「漣……ちょっと……」

小声で漣を呼んだ

「お前ら演奏できんの？」

「え？あ、ああ簡単なものなら…」

「なら聞かせてやれ。ああなった以上留まらせるためには演奏だ。それで駄目ならしかたねえ」

「わかった」

澪は頷き三人を集めた

「平沢」

「グスツ…クーくん？」

「皆が演奏してくれるってよ。それ聞いてからでも本当に入部しねえって事決めても遅くねえんじゃねえか？」

「演奏…してくれるの？」

平沢が三人を見ると全員が頷いた。平沢は泣き止み長椅子に腰を下ろした。俺は壁に背中を預けた

「ワン・ツー・スリー・フォー…」

翼をくださいのカバーした曲を演奏した三人、とてもじゃないが上手いと言えないがそれでも充分平沢の心に響いているのを確認できた。そしてそれは俺にも響いた

パチパチパチ

平沢から拍手が起こり席を立った

「なんていうか…凄く言葉にしにくいですけど…」

律が期待をこめた眼差しを平沢に向けたが

「あんまり上手くないですね！」

バツサリと切られた

「でも…なんだかすっごく楽しそうでした！私…この部に入部します！」

その言葉を聴いた漣と律はお互いの頬を抓って夢じゃない事を確認すると律はその場で万歳し漣はこっちにやってきた

「ありがとな！空也のおかげで廃部にならなそうだ！」

「よかったな…」

俺は漣の頭をポンポンと叩いた

「あ、ああ…それでなんだが…空也も入部しないか？」

漣が顔を赤らめながら提案してきた。そんなもの最初から答えは決まっていた

「ああ、てか俺は最初から入部するつもりだったよ。それに…」

「それに…何だ？」

「澗からの頼みを俺が聞かない訳は無いからな」

その言葉を聞いた澗はさらに顔が赤くなった

「お熱いねえ、お二人さん。まあ今はいいや。記念写真撮ろ！ほら澗もクウも！」

律が手招きして呼んでいた

「行くか」

「ああ」

ふたりは並んで歩き出した

第二話（後書き）

アニメ第一話です

オリジナルの部分も有りますがご了承ください

第三話

俺が軽音部に入部して翌日…

「うーん…」

俺は自室にあるエレキとアコギを見比べていた

「エレキでいつか…」

エレキギターを左肩に担ぎ自室をでた

「ん？何だお前？ギターなんて持って」

「使うから持ってんだよ」

親父が興味なさ下に新聞を読みながら聞いてきた

「近くの秋山さん所の娘さんと同じ部活に入ったんですって」

母さんが朝食を運びながら親父に付け足した

「お前ら、小さい時から…お前…もしかし「うるせえ…」「ぐあ！」

親父のボディにパンチをぶつけ朝食を食べた

「ま…一生に一度の高校生活だ…後悔するなよ…」

「わかってる…」

朝食を食べ終わるとギターを担いで家を出た

「あ、おはよう空也」

家の前に漣が待っていた

「何でいるんだ？」

「同じ部活に入ったんだ。一緒に登校してもいいだろ？」

「好きにしるよ。とにかく一刻も早くここから立ち去りてえ」

俺は自宅の窓を指差した、そこには親父と母さんが覗き見をしていた

「そ、そうだな……」

俺が歩を進めると漣はそれについてきた

「そっぴゃ、律はどうしたんだよ？」

「律は寝坊したから……」

漣は俺に携帯を見せそこには……『寝坊したから先にいって』と書いてあった

「ていうか、空也。ギター持ってたんだな……」

「ああ。お前は俺んちに入ることが無かったからな。大地とかなら知ってたぞ」

「へえ…空也のギター聴いてみたいな」

「放課後に見せてやるよ」

雑談を繰り返しつつ桜校の校門までついた

「空也、ギターを置きにいこう」

漣が音楽準備室の鍵を見せ、軽く頷いた

「じゃあ、放課後でな…」

「ああ」

漣と別れ、それぞれ自分の教室に向かった。教室に入ると大地が飛びついてきた

「くっやーーーー！ぐあっ！…！」

大地の腹部にパンチを浴びせ教室に入る

「空也君…おはよう」

「ん？ああ真鍋か…おはよう」

真鍋が近寄ってきた

「大地君ほっといていいの？」

「俺の知ったことではない。そのまま永遠の眠りについてほしいぐらいだ」

そついいながら俺は席に着くと真鍋がそれに着いてきた

「空也君、唯の事ありがとね」

「唯？ああ平沢のことか」

「うん、あの子高校に入って何か部活したいって言ってたから」

それを言う真鍋はまるで保護者の顔だった

「空也君なら何か安心できそうなんだ、唯の事よろしくね。後、和でいいよ」

そついうと満足したかのように真鍋…もとい和わ自分の席に着くとすぐに担任がやってきた

昼休み…

「そついや空也、今朝澪ちゃんと一緒だったな」

「何で知ってんだ？」

「見たから」

「つぜえ」

「つっせ！お前にもてない男の気持ちが分かってたまるか！」

「お前のがうるせえ。つーかどっかいけ」

「空也の……バカー……!!」

大地が泣きながら廊下に飛び出していった。これで静かに昼食が食べられるな。それから午後の授業は寝てすごした

放課後…

「クーくん！一緒に部活にいこー！」

平沢が満面の笑みで近寄ってきた

「ああ」

特に拒否する理由も無いので一緒に音楽準備室に向かった

「こんにちはー」

「……………」

平沢が元気よく挨拶するとすでに来ていた漣、律、琴吹がそれぞれ挨拶をした

「まさかクウがギターやってたとはなー」

律が俺のギターケースを見ながら言った

「え！！クーくんギター弾けるの!!」

「誰が初めてつったよ…よっと…」

ギターのストラップを肩にかけアンプをつなげる

くく

軽くストロークすると次はこの前三人が弾いていた翼をくださいを
ロック調に弾いた

「ま、軽くこんなもんだろ」

四人を見ると表情が固まっていた

「どっした？」

俺は首を傾げた。静寂を破ったのは澪だった

「すごい…」

「ああ…」

澪と律が目をキラキラさせていた

「俺のことはどうでもいいが、琴吹、茶が零れてるぞ」

「え？ああっ！」

今それに気づいたようで慌てていた

「そういえば、なんで澁ちゃんはギターじゃないの？」

平沢がふいに澁に聞いた

「ギターは…その…恥ずかしい…」

「恥ずかしい？」

「ギターはバンドの中心で自然と観客の目も集まるだろ？それを想像しただけで…もう…」

ポフン！

澁の頭から爆発音がして澁は机に伏せた

「澁は恥ずかしがり屋だからな。まあギターはイケメンのクウだけどな〜」

「俺はイケメンでは無いだろ」

「その顔で何を仰るのかな？クウがイケメンじゃなかったら大地はどうなるんだよ」

「そうですね。空也君はカッコいいと思います。」

琴吹がおっとりとした表情で告げた

「もうなんでもいいが、ギターは俺と平沢で、ベースが澁、キーボードが琴吹、ドラムが律だな？」

「りっちゃんはドラムって感じだね」

平沢の言葉に律が反応した

「私にだって深い理由があるんだよ！」

「理由？どんな？」

平沢が目をキラキラさせながら律に聞いていた

「それは…そのーカッコいいから」

「えーそうなの？」

「だってギターとかキーボードとか手でチマチマしてイーイーってなるんだよ」

律が全身で表現していた

「ムギちゃんは何でキーボードやろうと思ったの？」

「私小さいころからピアノを弾いてたの。コンクールで賞も貰ったのよ」

「（なんでそんなやつが軽音部にいるんだ？）」

俺の思いをよそに復活した澁が声を発した

「平沢さんはもうギタ「唯でいいよ」「え？」

「私もう遷ちゃんのことを遷ちゃんって呼んでるし、あ！クーくんも唯ってよんで！」

「じ、じゃあ…ゆ、唯…」

遷が平沢に向かって上目遣いで唯って呼ぶと。矛先が俺に向いた

「じゃあクーくんも！」

「唯、もういいからギターはもう買ったのか？」

あっさり唯というと唯は不満げな顔をし、なぜか遷も同じような顔をしていたが見なかったことにしよう

「空也君！私も私も！」

「わかったよ。絀でいいんだろ？」

「はい！」

何がそんなに嬉しいのか分からんが絀はニコニコしていた

「ギターって値段どれくらいするの？」

「安いのなら一万円ぐらいからあるが…」

「安すぎても駄目だ、そつだな五万円ぐらいのを買えばいいよ」

俺と遷がギターの値段について説明する

「じゃあクーくんのは、どれぐらいしたの？」

「俺のは八万ぐれーだった中学の三年間必死で小遣いを貯金してたからな」

「そんなにするの！あのーりっちゃん…」

唯が笑顔で律に向いた

「部費で落ちませんかね？」

「おちません！」

唯がバツサリ切られ、元気をなくした唯に紬がお菓子で元気付けしていた

「とにかくだ、唯に楽器が無いことには始まんぞ」

「じゃあさ、今度の休みに皆で楽器見に行こうぜ！」

律の提案に皆は頷いた

「俺もか？」

「当たり前だろ。空也が居なきゃ詳しいこと分からないしな」

「そうですか…」

行くしかないようだったそして週末…

「行くぞー空也ー！」

俺がエスケープしないように漣が迎えに来た

「はいはい」

二人で待ち合わせ場所の商店街に向かっていった。商店街に行くと律と紬がすでに待っていた

「見せ付けますなあ、美男美女のカップルは」

ニヤニヤしながら寄ってきた

「り、律！名に言ってるんだ！」

ニヤニヤする律と慌てる漣の漫才を見てると唯がやってきたが、人にぶつかり、犬を可愛がりに行ったりとなかなかたどり着けないでいた

「お金は大丈夫だったの？」

女子が二、三步前を歩き、俺が後ろから付いていくと唯がふいに立ち止まった

「今なら買える！」

ブティックのショーウィンドーに目を光らせていた

「楽器買つんだろ！？」

律が連れ戻そうとすると、唯が店の中へ入っていった

「漣、俺その辺の本屋に居るから帰ってきたら呼んでくれ」

「わかった…」

女子四人はブティックの中に姿を消していった。俺は本屋の音楽雑誌を読み漁り、しばらくすると漣が迎えに来た

「ごめん、待たせた」

「想定内だ」

読みたい雑誌を一通り読んだところで楽器屋に行くかと思えば喫茶店に入っていった

「楽しかったねー」

だの

「へへー買ったよ」

だの唯と律は思い思いの事を口にした

「次はどこにいこっか？」

ついにはそんなことを言い出した

「「楽器だ楽器!」」

俺と漣は口を揃えて言った

そんなこんなでやっとこさ楽器店『10GIA』に着いたここは品揃えがよく俺も頻繁に来ている場所である

「ギターがいつぱいだねー」

唯が感想を口にするのと同時に俺は単独行動で自分が欲しい弦の換えやらその他諸々を物色し、唯に合いそうなギターを探していると

「これいいんじゃない？」

価格が四万八千のネックが細めのギターを発見し、漣たちに合流した

「あっちにお前に合いそうなギターが合ったんだが…それがいいのか？」

唯はあるギターに夢中だった

「止めはしないが払えるのか？そんな額？」

値段を見ると二十五万と書かれていた

「うーん…さすがに手が出ないなあ…」

と言いつつも視線は離れなかった

「私もあのベースを買うとき相当悩んだからなあ」

「あたしもあのドラムを買うとき値切りまくったしなあ」

「店員さん泣いてたがな」

漣、律、俺がそれぞれ口にした

「あの一値切るって？」

「欲しいものを安く手に入れるために努力と根性で安くさせたんだ」

紬の質問に律が自慢げに答えた

「すごーい！なんか憧れます！」

「「憧れる要素がどこに！？」」

そんなやり取りをしても唯はギターから目を離さなかった

「じゃあ皆でバイトしようか！唯のギターを買ったために！」

律が言い出した

「これも軽音部の活動だよ！」

「私やりたいです！」

律と紬が賛成し、唯も嬉しそうな表情だった

「バイトか……」

漣は不安そうな顔で呟いたのを俺は見逃さなかった。その日の帰り道

「　　」

律が先行し、俺と漣が並んで歩いていた

「大丈夫か？」

「何がだ？」

「バイト」

「不安は有るけど。唯の為、軽音部のためって思えると思
う」

「そうか」

俺は軽く笑うと逆に漣から話しかけられた

「空也も…ありがとな。心配してくれて」

漣が俺に向かって笑った。その顔を見て俺は顔を背け

「漣とは長い付き合いだし…な」

そっぽを向いて喋るしかなかった

翌日の放課後…

「何のバイトがいいかなあ」

全員でバイト探しをしていた

「ティッシュ配るのは？」

「無理……」

「ファーストフードの店員は？」

「駄目かも……」

律と紬の意見をことごとく澪が却下していた

「澪にはハードルが高いかもなー」

律がフォローするとまた悪いことを考えたのか澪は頭から蒸気を発して机に伏せてしまった

「やれやれ……」

求人雑誌に目を通してしていると澪でもできそうなのを発見した

「これなら澪にもできんじゃないかね？」

机に広げて俺が指差したのは道路交通調査の求人だった。これは比較的人に関わり無くできるもので澪にも適していた

「車の台数や通行人の量を調べるんだよ。カウンターをもってな。どうだ？」

それならと澪は頷き、週末の二日間は交通量調査のバイトが決まった

週末…

「……………」

カチ、カチ、カチ

カウンターを押す音だけが俺たちの中で響いている

このバイトは総勢八人で行い女子四人、男子四人で別々の場所で調査している。俺の他には大学生と見られる明らかにがり勉の男三人で話すことが何も無い、よって無言でカウンターを押している。向こうは俺を不良だと思っているらしく、ビクビクしている

「（やりにくいったらねえな）」

仕方なしに鞆から音楽機器を取り出しイヤホンをつけ音楽を聴きながらカウンターを押していく

そんな感じのバイトが二日続き二日目の夕方

「……………」お疲れ様でした「……………」

バイト代を貰い頭を下げる一日八千円で二日で一万六千それが五人で八万、当初の五万を足してもまだ足りない

「分かりきった事だったが、まだ足りねえな」

「そつだな、後何回かバイトするか」

「また探そうぜ」

俺、漣、律がそれぞれ口にする。唯が口を開いた

「私、やっぱりいいよ、このバイト代は皆それぞれで使って。私はクーさんの薦めてくれたギターを買うよ、私、早く練習して皆と一緒に演奏したい、だからまた楽器店に行くのにつきあって」

唯がそう言うなら俺たちは頷くしかない。バイト代を返却され唯は帰っていった

それから数日後俺たちは『10GIA』にいた

「こつちだ」

俺が案内をしているとやっぱり唯はあのギターの前で立ち止まった

「やっぱりあれがほしいんだな」

「よし、またバイトするか」

漣と律が意気込んでいたが絢が何かを閃いたようだった。なんとなく察しはつくがな

絢がカウンターから帰ってくるとあのギターを五万で売ってくれるとのことだった

「このお店うちの系列なの」

「え！」

紬の言葉に漣と律が固まった

「やっぱり琴吹財閥の娘さんだったか…」

「はい、天城グループの息子さん」

同じ調子で返してきやがった。秘密にしていたのにな…

「「ええ！」」

漣と律はなお固まった

「空也、それ本当なのか?!」

「まあな、俺たち直接会ったことは無かったが財閥の跡取りだ」

「クウの家普通の家じゃん！」

「贅沢する必要が無かったからな」

そんな中何も知らない唯がギターを買って帰ってきた

「ただいま〜皆何してるの?」

「何もしてねえよ。さあ帰るぞ」

俺は踵を返して家路についた

翌日…

「ふんす！」

唯がギターを持って胸を張っていた

「ギターを持つと様になるな」

「何か弾いてみて」

澪と律がそれぞれ口にする

「うーん…」

唯が弾いたのはなぜか ルメラだった

「まだ練習してないのか？」

「ギターってなんかキラキラピカピカしてて触るの怖くって」

「弾けよ」

「まだフィルムも外してねえしな」

それを見た律は一気に唯のギターのフィルムに手を掛けはがしてしまったショックを受けた唯に紬がお菓子で期限を取り戻させた

「どうやったらライブみたいな音が出るのかなあ…」

「アンプに繋がればでるよ」

律が唯のギターをアンプにつなげ唯がギターをストロークする

「ここからやっとはじまる…」

「軽音部が…目標はでっかく卒業までに武道館！」

「それは無理だ」

俺の突っ込みに律はぶつぶつ言っていたが無視した

「やっぱり私にはまだはやいねー」

唯はアンプのコードを抜こうとした俺はその瞬間鞆からイヤホンを
だしてノイズンセリングを起動した

とたんに爆音が流れ俺を除く四人が耳をふさいだ

「ポリューム下げたらじゃないところなるんだよ」

「先に言ってよ」

「クウ、卑怯だぞ！」

「正当防衛だ」

そんなこんなで唯もギターを買いやっところから桜高軽音部が始動
する

第三話（後書き）

アニメ第二話です

いろいろぶっ飛んだ設定になっております
ご了承ください

第四話

唯がギターを始めてしばらくが過ぎた…

「クーくん、ここが分かんないんだけど」

漣から渡された『サルでも分かるギター』という本を貰い、唯はその本を見ながら分からないところは俺に聞きながら熱心にコードの練習に励んでいた

「ギターの弦って怖いよね、細くて硬いから手が切れちゃいそう」

「そうだな。手の皮が柔らかいうちは手が血まみれになってもおかしくは無いが「キヤーー!!」ん？」

「漣ちゃんどうしたの？」

唯が隅っこで小さくなっている漣に問いかけた

「痛い話は駄目なんだあ」

両手で耳を塞いで聞こえないそぶりをみせる

「漣らしいな…」

そんな漣に唯がトコトコ歩いて行って手を差し出した

「大丈夫だよ、漣ちゃん。本当に血が出るわけじゃないから」

それを確認した澁は立ち上がり咳払いをした

「まあ、やってるうちに皮膚が硬くなってくるから大丈夫だよ」

ほらと澁は唯に右手を差し出すと唯は見当違いの事を言い出した

「本当だーぷにぷにー」

澁の右手をぷにぷに押ししていくと遂に澁のほづが恥ずかしくなってきたようで俺に目線だけで助けを求めてきた

「唯、練習再開するぞ」

唯の首を掴んでずるずる引っ張っていく

「はあ……」

澁は助かったようなため息をついていた。しばらく練習しているとお開きの時間になってきたのでギターを片付け帰路についた

「そついやもうすぐテストだな」

「そつだな」

「……………」

俺の言葉に頷く澁と無言で汗を流す律

「澁は大丈夫そつだな」

「あたしはあ!!」

律が声をあげ抗議する

「俺の目を見て大丈夫って言えるか？」

「うつ…ごめんなさい…み〜お〜」

ついに漣に泣き付いてしまった

「毎回だな」

「うるせークウ！中学から50点位しか取れないのに！」

「じゃ勝負してみるか？そっちは漣に教えてもらえよ」

「空也、大丈夫なのか？」

漣は心配そうに俺を見るが俺は黙って親指を立てた

「律に負ける気がしねえ」

「そこまで言うならやってやる！」

律が俺に向かって拳を突き出した

「俺が買ったらハンバーガーのセットを奢れ、お前が買ったらハンバーガーのセットを奢る」

「いいぜ。こっちには漣がついてんだ！」

「澗が証人だ。踏み倒しはきかねえからな」

そんなこんなでテストの点数を競うことになった俺たちはテスト期間に突入する

「負ける気がしねー」

それから数日ごテストが帰ってきた

「ん〜！テスト終わったあ！」

「高校に入って急に難しくなったから大変だったわ」

「そうだな、そしてもっと大変そうな奴がここに」

唯が力のない笑いで答えていた

「クラスでただ二人追試だそうです」

暗い顔で12点の答案を見せた

「うわぁ…」

「大丈夫よ唯ちゃん、今回の勉強の仕方が悪かったただけだって」

「そうだよ。追試なんて余裕余裕！」

紬と律が励ましていたが数秒後に過ちだったと気づかされる

「まあ、勉強はやってなかったんだけど…」

「あたしの励ましの言葉を返せ！」

律が怒鳴った

「ねえりっちゃんは何点だったの？」

唯がいつもの指定席で律に聞いた

「ふっふっふ。今回のあたしは頑張ったのだよ。見よ！」

テストの答案には89点と書かれていた

「こんなのりっちゃんのキャラじゃない…」

「今回はクウとの勝負してたからな」

「そうなんだ。澪ちゃんとムギちゃんは？」

二人から渡された答案を見ると律が絶句していたが俺を視界に入れるとニヤリと笑った

「さーて問題のクウは何点だったんだ？」

「ん」

「あいた！」

ピツとテストの答案を紙飛行機にして律のデコに当てた

「ちくしょー負け惜しみしゃがって…」

ガサガサと紙飛行機を戻していくと律の汗の量が多くなった

「溇に教えてもらってそれではまだまだだな」

「空也は何点だったんだ？」

溇が覗き込むと溇も驚愕していた

「ま…満点…」

「溇も細もさして変わんねえだろ」

「そっただけど…」

律はずっと固まっていた

「これが実力だ」

ポンと律の肩を叩いた

「ちくしょー!!」

律は叫びながら準備室から出て行った

「でも中学のときはあんまり取ってなかったのに一体どうしたんだ？」

その質問に答えたのは俺じゃなく紬だった

「でも天城グループの御曹司ですから、これくらいは普通じゃない？」

それを聞いて澁が頷いた

「そういえばそうだったな」

「中学のときはそんなことバレて無かったから、50点くらいで抑えてたんだよ。んなことより唯の追試を考えねえと」

すっかり忘れられた唯にもう一度焦点を当てた

「確か追試の生徒は合格点取れるまで部活にでねえらしいからな」

「そうなの!？」

「詳しいことは明日告知されんだろ。今日ぐらいはみっちり教えてやるよ」

そう言っつて俺は長椅子から立ち上がりお開きになるまで唯にギターを教えていた

翌日…

「クーくんの言っつとおりでした、一週間後の追試まで部活に出ちゃ駄目なんだって」

「言わんこつちや無いな、しっかり勉強して来い。ま、今日のお菓

子ぐらいは食ってけ」

今日のお茶菓子である羊羹を指差した

「うん！」

ニコニコしながら羊羹をたべる唯の前に俺の分の羊羹を差し出した

「やる」

「ありがとー！クーくん！」

俺は長椅子に座りヘッドフォンをあてギターを持った

「空也何してるんだ？」

「ん？ああ、ちょっとな」

曖昧な返事で溲は頭に？マークを浮かべティータイムに戻っていった

今俺は夏休みに向け作曲中である。気が早いような気もするが現時点で唯が追試で練習できないし、夏休み中に練習できれば桜高祭で演奏できる。それをするためにも今からでも開始しないと間に合わないかもしれない、なんせ現時点で音あわせ自体出来てないのだから

俺は鞆からルーズリーフを出し思考を巡らせる。しばらく考えていると紬が目の前にいた

「お茶はいかが？」

俺に紅茶を差し出してきた

「ああ、サンキュ」

素直に受け取り、一口飲む

「ん、うまい」

「よかった」

感想を聞くと笑顔を見せ自分の席へ戻っていった

一息ついた後に作曲を再開するがお開きまでまるではかどらなかつた

翌日以降、唯は部活に顔を見せなくなった残りの三人は唯の心配を、俺は作曲に専念していた

そして日は過ぎ追試前日…

「澪ちゃん。勉強教えて」

唯が澪に泣きついてきた。どうやら勉強できなかったようだ

ダダダダッバン！

「空也、勉強教えてくれ！」

大地が準備室に駆け込んできた

「うちのクラスの追試ってお前だったか」

「頼むよ。空也しか頼れないんだよ」

「わかったわかった。部活上がりにお前んち行ってやるから、家で待ってる」

そういうと大地は頷いて準備室から出て行った

「やれやれ… 澪は唯を教えるんだろ」

「ああ、このままだと唯が退部になりそうだからな。唯の家でみっちり教える」

「澪ちゃん！」

唯が抱きついて感謝を表していた

「なら今日はもういってやれ。少しでも時間が長いほうがいいだろ」

「空也はどうするんだ？」

「俺はあの馬鹿を教える。まあ、アイツが退学になろうと知ったことでは無いが」

そういつている間にも俺はギターをケースにしまい立ち上がった

「じゃあな。唯しっかり勉強しろよ？俺達と軽音部続けたいならな」

それだけ言って準備室を出てドアを閉める瞬間に

「また明日な！空也！」

漣が笑顔で言っていたので漣に分かるように右手を上げて応えた

「行きたくはねえがな」

階段を下りながら、鞆からヘッドフォンとルーズリーフを取り出した、ヘッドフォンからは出来かけの曲をルーズリーフからその譜面を出し考えながら大地の家にもかった

大地宅…

「あら空也くんいらっしやい」

「どーも。大地は？」

部屋に居るわよと家に招き入れられ、大地の部屋に入る

「空也！待ってたぞ〜」

あるうことかゲームをしてやがった

ブチッ

無言でコードを引っこ抜く

「ああっ！なにしやがる！」

「それはこっちの台詞だ。わざわざお前如きの馬鹿のために来てやっただ。勉強しやがれ」

「お前言葉に棘しかねえ…」

大地はしぶしぶ勉強をはじめた。そして俺はコードを繋ぎゲームをはじめた

「教えてくんねえの？」

「質問は五分に一回受け付ける。自分の分かる範囲でやってみろ」

大地は素直に従った。このペースで勉強を教えていき七時頃にはある程度まで問題を解けるようになった

「こんだけできりゃあ充分だ。あとは明日結果を出すだけだ」

「くうや〜!」

大地が俺に飛びついてこようとしたが避けた

「男に、こともあろうかお前に抱かれて喜ぶ趣味はねえ。俺は帰るぞ」

そう言って大地の家からだとケータイが震えた

「ん?」

ケータイのディスプレイには律と書かれていた

「なんだよ」

「クウもこつちこねえ？」

「は？」

「だから唯の家だよ」

「何で俺が、唯を教えんのは漣がいるだろ？」

「いいから！いつも唯と別れるところで待ってるからな」

それだけ言っただけで律は電話を切ってしまった

「仕方ねえ、いくか…」

しばらく歩いていると律を見つけた

「遅いぞ！クウ！」

「そりゃ悪かった。さっさと行くぞ」

俺は唯の家に向かって歩き出した。律は俺の横に並んで歩き出した

「最近さ、お前何してるんだ？」

「人に物を聞くには説明不足だな」

唯の家に行く途中で律が聞いてきた

「部活だよ。漣やムギが聞いても曖昧な事しか言わないじゃん」

「今の段階ではまだ話せないな」

俺の言葉に律は不満げな顔をしたがすぐ笑顔になった

「音楽だけは真面目だからな。話せる時になったらちゃんと話してくれよな」

見透かされたような気はしたが素直に頷いた

「ここだここ」

雑談を繰り返していると唯の家に着いたようで律はインターホンを押していた

「律さんおかえりなさい」

唯に似た少女が出迎えてくれた

「誰？」

「妹の平沢憂です。よろしくお願ひします空也さん」

少女と俺の目が合うと少女は礼儀正しく自己紹介してくれた

「ご丁寧にごーも。天城空也だ、よろしくな」

「お姉ちゃんからよく話は聞いてます。ギターを教えてもらってるって」

平沢妹からスリッパを出され俺たちは唯の部屋に向かった

「皆ークウが来たぞー」

律が先頭に次に平沢妹、最後に俺の順番で中に入っていた

「和？」

そこには軽音部のみならず和がいた

「こんばんは、空也」

適当な所に腰を下ろすと平沢妹がお茶を差し出した

「空也さん、お茶どうぞ」

「ああ、サンキュ。しかし出来た妹だな」

「でしょークーくん！憂々クーくんに褒められた」

唯が平沢妹にくつつく

「別に唯を褒めてるわけじゃないんだが」

この言葉に平沢妹が反応した

「お姉ちゃん男に人に呼び捨てにされてるんだ。凄ーい！いいな」

今度は平沢妹が姉を称えた

「私も名前で呼んでもらっていいですか？」

目をキラキラさせて平沢妹が迫ってきた

「じゃあ憂ちゃんでもいいか？」

はい、と満面の笑みで返され律が眩しがっていた

「で？俺をここに呼んだ理由は？」

「特に無いぞ」

漣が予想外のことを言い出した

「帰っていいか？」

「それは駄目だよクーくん」

「駄目です」

唯と紬が拒否した

「大変ね、空也も」

「和だけだな分かってくれるのは。」

それからしばらく皆で雑談し不意に俺と和の口が揃った

「そんなことより勉強は？」

俺と和以外の全員が黙ってしまった

「澪…忘れてたな？」

「うっ！」

澪は慌てていた

「はあ…さつさと教える下で待っててやるから」

そういつて立ち上がった

「あ…ああ！」

澪は笑顔で返事したのを見ると軽く俺も笑った

「憂ちゃんもいこう、お姉ちゃんの邪魔になるからな」

「はい！」

「じゃあ私も帰るわね」

和も立ち上がり帰る支度をしていた

「また明日な和」

「ええ、空也もおやすみなさい。またね憂」

玄関で和を見送りリビングに向かう

「空也さん、お茶いかがですか」

「ありがとう、いただきよ」

憂ちゃんとはばらく雑談していると律が下りてきた

「憂ちゃんなんかゲームしない？」

どうやら居心地が悪くて降りてきたようだ

「いいですよ」

憂ちゃんがそういうと二人はゲームをやりだした俺はギターを弾くのはさすがに迷惑なので文庫本を読んだしばらくすると漣と紬が下りてきてお開きになった

「遅くまで悪かったな」

「いえ、皆さんまた来てくださいね」

漣と憂ちゃんのやり取りを横目に全員が出て最後に俺が出ようとすると

「空也さん、連絡先交換してください」

とケータイを差し出してきた。漣たちに先に行っててくれと合図し俺のケータイを出して連絡先を交換した

「またな。憂ちゃん」

挨拶を済ませ家を出て漣たちに追いついたそれから紬と別れ、いつもどおりの通学路を三人で歩く、夜も遅いので二人を家まで送る

「姉ちゃん、遅かったね」

と律の家の前まで来ると一人の男の子がいた

「澪たちと遊んできたんだ」

男の子がこっちを見ると笑顔にしてこっちに向かってきた

「兄ちゃん！また一緒にゲームやろうよ！俺強くなったよ！」

意気揚々と言った感じで俺に言ってきた

「また今度な。聡」

聡という少年は律の弟でなぜか俺のことを兄ちゃんと呼んで慕われている

「じゃあ、また明日な律」

「澪もな。クウ！夜が遅いからって澪を襲うなよ！」

「り！律——！」

澪が顔を真っ赤にして抗議していた

「近所迷惑だ。じゃあな律、聡も」

澪の頭を軽く叩き律と聡に挨拶し歩き出した

「姉ちゃん、やっぱりあの二人仲いいね」

「そうだな、漣が男子でただ一人ありのままの自分で居れるのがク
ウだからな」

この姉弟がそんなことを言っていたなんて知る由も無かった

「ありがとな空也」

「ん？」

「唯の家に来てくれて、今もこうやって送ってもらってるし」

漣が不意にそんなことを言い出した

「別に礼を言われるようなことはしてねえよ。俺がそうやりたいか
らやってるだけだ」

「それでもありがとう」

街灯に照らされ満面の笑みを浮かべる漣を直視できなかった

「ああ…」

目を背けそう口にしたが気が気じゃ無かった

翌日の追試で唯は見事に満点をとり追試をクリアした後不本意なが
ら大地もギリギリでクリアした

「さて、勉強中もコードの練習に励んだと言う話だから。軽く弾い

てもらおうか」

「どんとこいだよクーくん。XでもYでも」

X？Y？俺と漣は顔を見合わせた

「じゃあ…」

と漣はコードの名前を言っていくが唯の手が止まっていた

「わすれちゃった…」

ついにはこんなことを言い出してしまった

「またーからかよ」

「じゃ空也後はよろしく」

「待てい、お前も付き合え」

漣の首元を掴み強制連行したのは言うまでも無い

第四話（後書き）

アニメ第三話です

結構話を膨らませてみました

第五話

夏休み直前のある日……

「ん？なんだこれ？」

「どうしたんだ？空也……」

漣と二人音楽準備室にいた時に見つけた段ボール箱その中身は昔の軽音部の物だった、その中に一つの桜高祭と書かれたテープがあった

「空也、このテープ再生できるか？」

「ちょっと待ってろ」

そういつて俺は鞆の中から小さなラジカセを取り出し、テープを入れ再生ボタンを押した

くくく

「上手いな」

「私たちも……」

この時漣の中に何か湧き上がっているのを確認できた。まあ負けず嫌いだしな、対抗意識しかないだろ

その日の放課後……

「合宿をします！……！」

漣がビシッと指をさして決めポーズをとった

「合宿？」

唯が首を傾げた

「もうすぐ夏休みなんだし」

「もしかして海？それとも山？」

律が的外れのことを口にした

「遊びに行くんじゃないよ。朝から晩までみっちり練習……だろ？」

漣は頷いたがすでに二人は聞いてすらいなかった

「うわぁーなに着ていこ〜」

「水着も持っていないかなきゃな」

「聞け……！！……！！」

案の定漣は怒鳴ったとりあえず全員を指定席に座らせ俺は長椅子に座る

「夏休みが終わったら、もうすぐ学園祭でしょ！」

「学園祭……」

「そう桜高祭の軽音部のライブは結構有名だったんだぞ…」

澪の言葉が尻すぼみになっていくのに対し律と唯は目をキラキラさせていった

「はいはい！！私メイド喫茶がやりたーい！！」

「え〜お化け屋敷がいいよ〜」

律と唯はまた違う方向へ脱線して言った

「考えても見る唯、澪にメイド服を着せてみる」

その言葉を聴いて俺の中で澪にメイド服を着せてみる……って俺まで脱線してどうすんだ

「ライブやるんだろ？」

いらん想像をしていた律は澪の拳骨をくらい怒られていたその時に袖が遅れてやってきた

「ムギはどう思うっ？いくらゆっくりやっていこうとは言ったって三ヶ月にもなるのにまだ全員で音あわせしてないことに」

確かに入部して三ヶ月になるがまだ一度も全員で音合わせをしていない、澪や紬とは何回があるが…

「でも…楽しそうですね。皆でお泊りするの夢だったの！」

なんとも小さい夢だな

「じゃあさ！海がいい？山がいい？」

律はまだ遊びに行く気満々だった

「遊びに行くんじゃないっての！」

「でもさ、いくら位するんだろ」

唯が核心をついた

「そうだぞ、スタジオ代もこめるといくら位すると思ってるんだよ」

「そ…それは…」

その部分を突かれるとさすがに漣は黙ってしまったがなんとか打開策を思いついたようだった

「ムギ…別荘とか…」

「ありますよ」

「「「……………あんのかい！！」「」「」

絢の隠す事のない告知に絢と俺を除く三人がツッコんだ

絢の鶴の一声で軽音部の合宿はとんとん拍子で決まったそしてその
日の夜…

「親父」

「ん？」

「夏休みに入ったら軽音部の合宿に行くから」

「そうか、どこに行くんだ？」

「琴吹財閥の別荘」

「おーそうか！琴吹さんとか！ハッハッハ！楽しんで来い」

親父は高笑いをして自室に消えていった。そして合宿当日

「ギターは二つとも持っていくか…」

右肩にエレキを左腕にアコギを右腕にキャリアバックを持ち集合場所に向かった

集合場所に到着すると唯を除く全員が集まっていた

「おはよう。空也、なんでギターケース二つなんだ？」

「エレキとアコギだ」

「二つも持ってたんだ」

「合宿なら使うかもしれねえしな」

しばらく雑談し集合時間が過ぎたが唯の姿がなくケータイも通じな

かった

「寝てるな」

俺はケータイを取り出し憂ちゃんに電話をかけた

「もしもし」

「憂ちゃんおはよう。お姉ちゃん起きてるかな？」

「今日から合宿でしたよね。すぐお姉ちゃん起こします！」

憂ちゃんが慌てて階段を駆け上がり唯の部屋に入り唯を起こし、電話は繋がっていたので唯に代わってもらった

「もしもし…おはよう」

「オハヨウゴザイマス…ごめんなさい！」

ケータイから唯の謝罪の言葉を聴き慌てて集合場所にやってきた

「ギリギリ間に合ったねえ」

「全く、空也が憂ちゃんの電話番号しらなかったらどうなったかとか」

唯が安堵の表情で澁が呆れた表情をしていた

「でもクウ、よく憂ちゃんの番号しってたな」

「前に唯の家に行った時に交換したんだよ」

通路を挟んで反対側に座っていた俺はそう答えた。なぜか漣が複雑な表情をしていたが見なかったことにしよう

しばらく電車に揺られ海が見えて律と唯がはしゃぎ別荘についた

「ごめんなさい。一番小さいところしか借りれなかったの」

と紬は謝っていたが漣、律、唯には充分大きいといった感じだった

「ま、高校生にはこんなもんだろ」

「「「え!」」」

俺の言葉に三人は驚いていた

「もしかして空也の家って…」

「超金持ち?」

漣と律が紬に聞いていた

「はい!」

「「……………」」

紬の即答に二人は黙ってしまったそれから別荘の中を見て周り、冷蔵庫を開けると高級な牛肉が入っていたそこに「空也へ」と書かれたメッセージカードが入っていた

「なんだ？」

「俺からのプレゼントだ！！父」

「あのくそ親父……」

裏から手を回してやがった……

「悪いな、紬。うちのくそ親父のおかげでどうも普通ではなそう
だ」

「いえいえ。天城グループのお気遣い感謝します」

二人が礼儀正しくお辞儀した

「なんか世界がちがうなー」

律が遠い目をしていた

「ムギ、スタジオはどこなんだ？」

「こっちです」

紬の案内に俺と漣はついていった。律と唯がついてこなかったが、
どうせ水着に着替えているのだから目の前海だしな

「しばらく使ってないけど」

前置きをして紬がスタジオのドアを開けた

「空也」

「ああ」

ギターを取り出しアンプに繋ぐ

ジャーン

「問題ないな…」

そのまま題名のない曲が作った曲を弾く

「空也君はやっぱりお上手ですね」

「空也が居てくれると唯を引っ張って貰えるから助かるな」

その言葉を聴きつつ一通り弾き終わる

パチパチパチ

「さすがくう」「遊ぶぞー!!」「もう!!」

漣の言葉を遮り律と唯が水着で入ってきた

「こうなることは分かってたけどな」

「そつだぜークウ!目の前に海があるんだから泳がないと損だぜ!」

「練習しに来たんだろ!!」

俺、律、澗の順番で喋ると紬も遊びたそうな目をしていた

「ムギ！行くぞ！」

「待つてるから…ちょっと待って〜」

律、唯、紬は行ってしまったふと横を見ると海に目が行っている澗がいた

「澗も行ってこいよ」

「だってここには練習に来てるんだし…」

「その気持ちはわかるが、なかなかこんなプライベートビーチみたいな所には来れねえから今のうちに存分に遊ばねえとな」

澗の背中を押し手助けする

「なら空也も来てくれ」

「ああ。わかった」

笑顔で答え澗は着替えにいった

「そっ…」

誰もいないこの時に新曲を軽く弾いておくか…

〜
〜
〜

フルコーラスではないが悪くないな…さあ澪たちが待ってるから着替えるか…

「やっときたぜ！おーいクウー！」

水着に着替え浜辺に出ると海で律と唯が手を振っていた

「はいはい」

軽く手を振りパラソルの下で腰を下ろす

「遅かったな。何してたんだ？」

澪が隣に腰を下ろした

「ん？新曲のチェックしてたんだよ、ほら唯が追試で来れない頃からやってたやつだよ」

「あれって曲を作ってたのか？！」

「まあな。今やってる一曲だけでは物足りないしな、後で譜面渡すよ」

「ああ、楽しみにしてる」

澪は嬉しそうに走っていった

「澪ちゃん嬉しそうでしたね」

「そうだな。あいつは何事にも真面目すぎるくらいだからな」

紬が反対側に座った

「それは空也君もでしょ？」

「こと音楽に対してだけな。漣とは普段の部活から合わせてやるから、漣の考えてることは大体分かる」

「クスッ本当にそれだけ？」

紬が覗き込んできた

「うるせ」

目を合わせるのが嫌で目を逸らした

「私ね、空也君みたいな生活を送りたかったの」

「え？」

「私の家は空也君も知っているとおりだからなかなか普通の生活がで
きなかったの」

「だから皆でお泊りするのが夢だっ
て言ったのか」

紬は頷いた

「小さい頃私と同じ様な家の子が普通の家に暮らしてると聞いて
羨ましかった」

「それって俺か？」

「うん、お父さんの話で聞いたただけだったけど本当に羨ましかった。だから…今こつやつて皆で遊んで皆でご飯を食べる。それだけですつごく楽しいの！」

それを言う紬の顔はとてもすがすがしい顔をしていた

「なら…もつと楽しまなきゃな」

俺は立ち上がって紬に手を差し出した

「うん！」

俺の手をとり立ち上がった紬は元気よく遊びに行った、軽音部の女子四人と一緒に遊んでいるのを確認すると俺は別荘に戻った

手早く着替えを済ませ、時間を見ると夕食の準備をする時間だった。親父のあまり嬉しくないプレゼントの肉の塊を取り出し一人分にカットしていく。カットが終わると米を洗い炊飯器にセットする。ご飯を炊いている間に付け合せのサラダやスープを作っていくベランダから海を見れば四人の姿が見えなかったのでカットした肉を焼く準備に取り掛かる。

「こんなところにいた！」

溲を先頭に四人がリビングに入ってきた

「もうちょっと待ってる。後は肉焼くだけだから」

「これ空也君が作ったの？」

「ああ、そうだけど？」

「これ凄くおいしい…」

絨がスープの味見をしていた

「あの肉の塊が綺麗にカットされてるぜ」

律が肉のチエックをしていた

「ちゃんとご飯も炊けてる！」

唯が炊飯器を開けていた

「薄ちよつとご飯入れててくれ。肉を焼いてしまつから」

厚切りにしたステーキを五枚暖めてある鉄板に乗せ上からブラックペッパーとニンニクをかけ両面を軽く焼いたらカットし別で暖めてあつた一人用の鉄板に乗せる

「ほいできた！」

一気に五枚分焼き全員そろつて食べる

「うまーい！」

「美味しいね！りつちゃん」

律と唯は「ご飯をお代わりして夕飯を食べる

「スープも具にしっかり味が浸みてる…」

「お肉が絶妙な焼き加減で舌の上で溶ける…」

漣と唯一舌が肥えてそんな細からも大絶賛だった

「ふう〜食った食った」

「おいしかったね〜クーくんのご飯」

「口に合って何よりだ」

キッチンで洗い物をしながら答えた

「空也、洗い物くらい任せてくれてもいいのに」

「じゃあ洗った食器拭いて片付けてくれるか？」

「わかった」

テキパキと動く漣を横目に俺は食器を洗っていく。細が問題発言するまでは…

「まるで新婚さんみたいね」

途端に漣の手から皿が落ちていく

「あぶねえ！」

とっさに皿をキャッチする

「ななな何言つて…」

澪の動きがギクシャクしだして一気に危なっかしくなっていく

「澪」

「ななな何だく、空也…」

顔を真っ赤にさせた澪が振り向いた

「もういいよ。ありがとな」

澪の手から皿を預かる

「先にスタジオで練習してくれ。これが終わったらすぐに向かうから」

澪はギクシャクしながら頷きスタジオに歩いていった

「ほら、お前らも先に行つてろ」

「はい…」

「ちえ…今日はもう疲れたよ」

「先に行つてますね空也君」

三者三様の答えが返ってきてスタジオに歩いていったそれを確認すると俺は黙々と家事を終わらした

スタジオにつくと律と唯が床に寝そべっていた

「遊びすぎだな」

「空也もムギもちょっと耳を塞いでてくれ」

漣がベースアンプを二人の頭元に置くとボリウムを最大にした。俺はヘッドフォンを袖に着けさせ電源を入れ、俺は耳栓を着けた。途端に耳栓を着けてても分かるぐらいの振動を感じ、二人が飛び起きた

「起きたか…ほれ」

起きたのを確認すると。全員に新曲の譜面を渡した。歌詞はまだフルコーラスができてないので書いてないが

「細みにたいにパツとできたわけじゃないが、あの曲とこれの二曲やろっぜ」

マスターテープが無いので全員の前で演奏する

「どうだろうか？」

曲が終わると意見を求めた

「私は良いと思う」

「カッケー!!」

「カッコいいね」

「私も好きです」

高評価を受け俺は胸を撫で下ろした

「よーしやろっぜー!」

完全に目が覚めた律を中心にまだタイトルの無い曲の通し、新曲『Funny Bunny』の個人練習に励んだ

「疲れた…」

律がスティックをドラムに置き床に伏した。時計を見ると結構長い間練習したので流石に俺も軽く疲れていた

「少し休憩するか…」

俺もギターを専用のスタンドにおいて軽くストレッチした

「外に涼みに行こうぜ」

律と紬、そしてなぜかギターを持って出て行く唯

「ひとまず俺らも行くか」

「そうだな」

二人でスタジオを出た

「そっぴゃスイカがあつたけど食うか？」

「ああ、頼む」

それを聞くと俺はキッチンに入って冷水で冷やしたスイカを水から取り出し五等分して皿に乗せて御盆にのせ塩を取って外に持っていく

「ほれ」

御盆に乗せたスイカをテーブルに置いて一つを漉に渡す

「ありがとう」

漉が受け取ったのを確認すると俺も一つとって漉の隣に座る

「何やってんだ？」

「さあ？それやったら練習に戻るからなー！」

「分かってるってームギ！そっちいいか？」

「うんー！」

「せーのー！」

律の合図と同時に絃が点火し唯の後ろから噴出花火が上がった

「最後の曲！いつくぜー！」

ライブの真似事なのだがその光景は充分感動的なものを感じ取った

「空也、そのラジカセ取ってくれないか」

漣は今聞かせるのが一番だと判断したようだ

「ああ…」

ラジカセを漣に渡す

「目指せ武道館！」

漣が拳を突き上げたの同時に漣が再生を押しした

「武道館目指すならこれぐらい出来る様にならないとな」

「上手いもんだな」

しばらく聞いているととんでもない声が聞こえた

『お前が来るのを待っていたあゝ…ギャーーーーー……！……！』

へびメタの音楽だった

「ん？」

俺の背中に漣が張り付いていた

「聞こえない聞こえない聞こえない…」

聞こえないと連呼していたそれを見た律は悪い顔をして漣に近づいていった

「膝の皿屋敷…」

「キヤー！！！！」

「膝の皿の内側にフジツボがびっしり…」

「いやー！！！！」

遂には俺に抱き着いて泣いてしまった

「律…悪ふざけしすぎ」

軽く律を睨む

「ごめんなさい…」

抱きつく漣の手を取り後ろを向く

「漣、大丈夫だ。お化けなんていねえよ。大丈夫だ」

手を握ったまま漣を慰める

「グスツ…ほんと？」

涙を両目いっぱい溜めて上目遣いで見てくる

「か、可愛い！」

「……！！！」

律と唯が少し遠くでそれを言ったが目の前でやられている俺にはとんでもない破壊力である

「お…俺、先に戻ってるから…」

手を離し、慌ててスタジオに戻る

「今のは駄目だ…今のは卑怯だ…」

俺の顔が真っ赤になってたのが手に取るように分かったので元に戻るまでギターを弾いていた

「クーくんどうしたんだろ？」

「溇のあの顔を真正面から見たからな、あの破壊力はすさまじいぞ。お、スイカあるじゃん！唯食おうぜ！」

律が冷静に分析していたことすら知る由も無かった

しばらくすると溇たちが戻ってきたが溇はまだ拗ねていた

「溇、悪かったって」

「っーん…」

そんなに可愛く拗ねないでください、俺が持たん…

「ねえクーくん」

「ん？」

「さっきのカセットのギターってそんなに難しいの？」

「もしかして弾けるのか？」

「うん！みてて！」

俺の目の前でさっきのラジカセの音と同じ音を鳴らす唯がいた

「どお！？」

「ちょっと待て…絃」

「はい？」

「ちょっと適当にキーボードを弾いてくれないか？で唯は聞いた音をギターで鳴らせ」

「「わかった」」

まず絃が適当にキーボードを弾き、終わった後で唯が俺が聞く限り完璧な音で弾いていく

「「どつだ？」」

紬は頷くだけだった

「絶対音感か…」

馬鹿と天才は紙一重というのがまさかここまでとはな

「絶対音感？」

唯が首をかしげた

「いや、わかんねえならいい。練習しようか…」

それからしばらく練習しお開きになった

「ふう…」

俺は今大浴場に浸かっている。女子たちは外付けの露天風呂に入っている

「今日は長い一日だった…」

本当に長かった…おかげでいろいろな事を知った充分収穫はあった
律も唯も明日は練習してくれるだろうそして…いま何故か溼の上目
遣いのあの顔が出てきた

バシヤ！

「いらん事考える前にさっさと出よう」

さっぱりとした気持ちでキッチンに向かうと誰だかわからない少女

がいた

「誰？」

「あたしだよ！」

そういつて前髪をあげる

「なんだ律か」

「なんだたあなんだ！クウはぜんぜん変わんねえな」

「それが俺の売りだ」

コップに牛乳を注ぎ一気に飲み干す

「今日は疲れた…俺は寝るぞ」

「溼なら外で涼んでるぞ」

俺は右手だけ上げて応えたバルコニーに出ると律の言ったとおり溼がいた

「寝ないのか？」

「あ、空也…ちょっと涼んでるだけだ」

「そうか…」

溼のとなりで手すりに背中を預ける

「空也は、合宿に来て良かったか？」

漣が景色を見ながら俺に聞いてきた

「なんだ？いきなり……」

「いや、思ったただけだ」

俺は立ち上がり、漣と同じように景色を眺める

「一言で言うなら良かった。まだ練習不足とかそういう要素は有るがバンドをやるに欠かせないチームワークがより一層高まったとは思う」

「ああ……私も空也の知らなかった所も知ったし唯やムギの事もな」

「他者の全部を知らなくてもいい。ただ一つでいいんだ」

「え？」

漣が俺の顔を見た

「ただ一つそいつの心の底にある想い、それを知ればいい。唯みたいに天真爛漫な生き方が全員できるわけじゃない、どんな形であれそいつの心の底にある想いは表現しているそれを汲み取ってやる事だ」

「……………」

漣は黙って聞いていた視線を俺から離さずに

「やっぱり空也は優しいな」

そういつて漣は笑った

「ガラじゃねえな。じゃあ俺は寝るから」

漣の頭を撫でバルコニーから戻ろうとすると

「おやすみ、空也」

俺は右手を上げ応え、自分に当てられた部屋に戻った

翌日：日中は海で遊び、夕方から練習という日程になった三日目の午後の電車で帰るので三日目の午前中も練習になったみっちり練習し家に帰る頃にはへトへトになっていた

数日後律が漣に見せてはいけない写真を見せて意識を落とされていたのは知った事ではない

第五話（後書き）

アニメ第四話です

途中で出てきた曲は実際にある曲でいい曲なので興味がある方は検索してみてください

第六話

合宿も終わり、夏休みも中盤に差し掛かってきたある日

「空也でかけるぞ。準備しろ」

親父が俺の部屋にノックも無しに入ってきた

「ノックぐらいしろよ」

「お前なんぞに持ち合わせるマナーは無い」

仮にもアンタの息子だぞ…まあいい

「で？どこに行くんだ？」

「パーティだ！」

親父は勝手に俺のクローゼットからタキシードを取り出し俺に渡してきた

「ご遠慮します」

「それは受け付けん！五分で着替える。もつ下に使いの者を用意したからな」

それだけ言って親父は部屋から出た

「俺の意見はまるで採用されねえな」

渋々渡されたタキシードに着替え、待たせてある使いの者…もとい
大地の父だが…の所に向かった

「久しぶりだな、空也君。大地が空也君が軽音部に入ってから話す
機会が無いって寂しかったよ」

大地の父…不動英雄ふどうひでおさんが車のドアを開け待っていた

「んなこと俺の知ったこつちゃねえよ。で？今日はどこのパーティ
に行くんだ？」

車に乗り込み、英雄さんが運転席に座る…というより親父はどこに
行ったんだ？

「今日は我が天城グループと琴吹財閥のパーティだよ」

「琴吹財閥とうちは関わりないだろうが」

紬と俺の家はお互いが巨大財閥で互いに名前を知っているだけで
本格的な関わりはなかった

「空吾から聞いたんだけど、この前、空也君と琴吹財閥のご令嬢が
軽音部の皆さんと一緒に合宿をやったそうじゃないか」

英雄さんの言葉に頷いた。ちなみに空吾というのが俺の親父の名前
である

「空吾は元々琴吹財閥に興味があってね、アプローチを掛ける絶好
のタイミングになったそうなんだよ。いつもなら代理の者を立てる

んだけど。この時は空吾自身が琴吹家に出向いてね」

「そこで意気投合したわけか…」

「ははは、さすが空也君、理解力があつて助かるよ」

「親父の事だ、これを機に本格的に琴吹財閥と親交を深めるつもりなんだから」

英雄さんは頷いた

「空吾はああ見えて会社の経営手腕はすごいからね」

「知ってるよ。親父がここまで大きくしたんだから」

「そして、それは空也君にも受け継がれてる。その理解力と洞察力は空吾を遥かに凌いでいる、天城グループはまだまだ大きくなるよ」

「気持ち悪いいよ。英雄さん」

英雄さんは軽く笑うだけだった

「さあ、着いたよ。琴吹家だ」

英雄さんがドアを開け絨が出迎えてくれた

「空也君、お待ちしておりました」

パーティの衣装らしくドレスを着ていた

「紬、合宿以来だな。ドレスよく似合ってるよ」

「ありがとうございます。空也君もタキシードよくお似合いですわ」

紬と共にレッドカーペットを歩く、会場に入ると俺たちにお辞儀をされ会場の中心に招かれる

「だからこういうのは嫌いなんだ」

会場が俺たちを一個人と見ない、見ているのは俺や紬の父を見ている、それが嫌だった。音楽なら…バンドなら俺を俺として見てくれる…俺という存在を確認できる、俺はここにいるんだと…

「やっぱりこういうのは嫌いだった？」

紬が心配そうに俺を見てくる

「いや、そろそろこれにも慣れなきゃいけない…俺個人として見られなくてもな」

「そうですよ、空也君には不安そうな顔は似合わないわ、もっと自分に自信持つてください」

「ああ、ありがとな」

紬に笑顔を見せ、シャンパンを手取る。もちろん俺達にあわせノンアルコールである

「おお紬ここにいたか」

奥から高級そうな和服を着た初老の男性がやってきた

「お父さん、こちら天城グループ会長の御曹司で」

「天城空也です。この度はお招きいただき感謝します」

シャンパンを置き深々とお辞儀する

「ははは、空也君。そんなに畏まる事はない。もっと気楽に」

「ありがとうございます」

俺は頭を上げた

「うむ、空吾さんに良く似ている。大きくそしてすべてを包み込む大空のような目だ…資質は空吾さんを凌ぐものを持っている…どうだ？うちの紬を嫁にせんか」

「お、お父さん！」

爆弾発言に紬が慌てていた

「俺はそういう政略結婚みたいな事は好きじゃないです。お互いの為にもなりません、金儲けのためだけに結婚をしたくありません」

俺ははっきり紬の父にそう告げた

「ははは、そういうと思ったよ、同じ事を空吾さんから言われた。いや、試すような事をして悪かったね。私も政略結婚は好きじゃないそれでは子供たちに申し訳ないからね。空也君ははっきりしてい

ていいもう一人前の男だね」

「いえ、そんなことは…」

「謙遜する事はない、それは君の父も言っていた事だ。『あいつは俺よりも人の上に立つ資質があるって』ね」

「親父が…」

「ああ、まあせっかくのパーティーだ楽しんでいきなさい」

琴吹父がそういつて去っていった

「ごめんなさい…父が」

紬が謝ってきた

「いや…いい親父さんだ。しっかり紬の事も考えてた、あの人なら俺の親父が興味を示す理由が分かる気がする」

「空也君…ありがとう」

紬が頭を上げ笑った

「礼を言われるような事は言っただけよ」

飲みかけのシャンパンを手に取り一口飲む

「そつだ。空也君せっかく会ったんだし音合わせしない？」

「構わないが、俺ギター持ってきてねえぞ？」

「向こうにあるから大丈夫よ」

絨に連れられスタジオに入ったそこにはキーボードやピアノ、ギターにヴァイオリンといった楽器が置いてあった

「ヴァイオリンか……」

ヴァイオリンを手にしクラシックを弾いていく

「なら私も……」

絨がそれに対抗しピアノに座って俺に合わせるその時少しスタジオの扉が開いたのを確認できなかった

一通り弾き終わるとスタジオの扉が勢い良く開いた

「親父！」

「お父さん！」

お互いの父親が入ってきた

「さすがだな空也。ギターやめてやっぱりヴァイオリンにしないか？」

「空吾さんこれやらない手は無いですよ」

琴吹父がすぐに係りの者を呼び俺たちはパーティ会場のステージに

上げられた

「ここでさっきのを弾いてくれるかい？」

「俺は別に構わないが、紬は？」

「私も大丈夫」

琴吹父に承諾の意思を示し、ステージの幕が上がる。そして親父がナレーションをする

「ご来場の皆様、予定を変更し我らが天城家と琴吹家の嫡子二人によるコンサートをお聞き下さい」

親父が目で俺達に合図し、俺は紬に目線を送ると紬が頷きクラシックを演奏した

くくく

演奏が終わると拍手が舞い上がった。俺たちは礼をしてさっきいたスタジオに戻った

「紬、こういうの慣れてたのか？」

「ええ、小さい頃良く弾いてたし、今日も弾く予定だったから。それに空也君が引っ張ってくれたから安心して弾けたわ」

「そりゃ良かった」

俺はヴァイオリンを置きギターを手に取った

「空也君のヴァイオリン凄く上手だったしカッコよかった…私…空也君となら…結婚しても…」

紬がぶつぶつ言っていたのを聞こえていたが聞こえないフリした

「何か言ったか？」

「ううん！なんでもない！」

紬が顔を赤らめて首を振った

「そうか、じゃ音合わせしようぜ」

「うん！」

それからしばらく紬と音あわせをしてパーティに戻っていった

「嬉しそうだね」

「そう見えるか？」

帰りの車の中で英雄さんが話しかけた

「ええ、あのコンサートから戻ってきた時清らしい顔をしてたからなんとなくね」

「まあ…な」

窓の外に目を向けると澗と律を見つけた

「悪い、止めてくれるか？」

車を止めてもらい先に帰っててくれと合図し漣たちも下に向かう

「二人とも何してんだ？」

「クウ、なんて格好してんだ？」

「ん？ああ忘れてたな」

目を下げるとタキシードのままだった

「カツコいい…」

漣が俺から目を離さなかった

「まあ確かによく似合ってるけどな。その姿を見ると改めてクウの家が金持ちなんだって思うな」

律も素直な感想を告げた

「そんな事より何してたんだ？」

「ああベースの弦を買いに来たんだよ」

漣が袋を見せてくる

「それからお茶しようって流れなんだけど。空也も来るか？」

「ああ、構わねえよ」

「クウのタキシード姿をもっと見たいもんね」澪

律が澪をジト目で見る

「り！律！」

澪が顔を赤らめ律に抗議する

「キヤー！クウ助けてー」

律が俺の背中に隠れる

「あ…」

澪と俺の目があう、するとより澪の顔が赤くなった。マジイ、このままなら俺も顔が赤くなりかねん

「さっさと行くぞ」

澪の頭をポンと叩き俺は歩き出した

「ちょっと待てよークウ！」

律が俺の後について来るそれから二、三步遅れて澪がついて来る。そして喫茶店に入りコーヒーを啜る

「タキシード姿のクウはコーヒーが似合うな」

「あ…ああ…」

澪がまだ顔を赤らめていた

「澪もいいかげん慣れるよ」

それを皮切りに三人で雑談をし夕方になったので俺たちは店を出た
律と別れ澪と二人帰り道を歩く

「夏休みももう後半分か…」

「そうだな…」

俺の呟きに澪が返した

「空也は夏休みの課題はもうやったのか？」

「ああそれは終わった、最近はずっとギターを持ってるよ」

「夏休みが終わるとすぐ桜高祭だもんな」

「ああ、初めての俺たちのライブ…絶対成功させような」

「ああ！」

俺たちは夕日に照らされ笑いあった

その日の夜…

「さて…」

俺はギターを手にしヘッドフォンアンプにつなぎ練習する

「空也入るぞ」

「もう入ってんじゃねえか」

親父が部屋に入ってから言った

「気にするな」

「気にするわ！で？何の用だよ」

「特に用は無い！」

じゃあ何で来たんだよ…

「あ、俺と母さんな明日からアメリカに行くから」

「何い！？」

結構重要なことだぞ 안타…

「で？いつ帰って来んだよ」

「分からん、仕事が片付くまで…一年ぐらいだな」

「結構かかるじゃねえか…良いのかよせっかく細んと」と繋がりが出たのに「」

「残念だがしかたない。英雄にしばらく任せる」

「英雄さんなら大丈夫だな」

息子の大地はどうしようもないがな…

「それにお前がああ娘さんと一緒に部活をやる限り大丈夫だろ」

じゃあなといって親父が部屋から出て行った

「けっこうな嵐を起こしていきやがったな」

アメリカね…親父たちが行くのは珍しい事じゃねえが一年はなかなか長いな

「練習する気も無くなったな…風呂入って寝るか…」

翌日…

朝に親父たちを見送り、そのままの流れで商店街を散策する

「そっぴやギターの弦とピックが少なくなってたな」

俺は『10GIA』に向かい弦とピックを購入した

「うーん…ゲーセンでも行くか…」

購入したものを鞆の中にしまいゲーセンに向かう

「あー！兄ちゃん！」

そこには律の弟、聡がいた

「聡じゃねーか。どうしたんだ？」

「家に居ても暇だし、遊びに来ただけど…一人じゃ面白くないね」
俺に期待の眼差しで見てる

「しゃーねえな…今からお前んちに行つてやるよ。ゲーセンは中学生には出費がきついだろ」

「さっすが兄ちゃん！」

目を輝かせて俺の手を取り俺を引っ張る

「分かったから手を離せ」

俺は苦笑いで律の家に向かった

「兄ちゃん早く早く！」

律の家に着くと聡が急かした

「姉ちゃんまだ起きてないよ」

律はまだ起きてないようだった

「兄ちゃんが来るの久しぶりだな」

聡がウキウキしながらゲームの準備をしながら呟いていた

「まあたまにはいいか…」

「俺強くなっただよ！」

聡がニヤリと笑った

「俺に勝ってから言えよ」

俺はコントローラーを持った

「…また負けた…」

聡が絶望の表情を見せた

「聡もまだまだだな」

時計を見ると一時すぎだった

「聡、ちよつと飯食おうぜ」

「うん、何食べる？」

次から次へとカップラーメンを取り出した

「聡…ちよつとキッチン借りるぞ？」

呆れて俺はキッチンに向かった

「ほれ」

簡単にチャーハンを作り、聡の前に置く

「兄ちゃん料理できたんだ。しかもめっちゃ上手い！」

聡がチャーハンをがつつくのを確認し俺も自分の分のチャーハンを食べた

チャーハンを食べ終わると洗い物をしながら聡と雑談していたところに寝起きで明らかに無防備な律が下りてきた

「ク…クウ！何でこんなところに！」

律が顔を真っ赤にしていた

「お前、無防備だな」

俺の言葉に余計に顔を赤くし慌てていた。律も普段はがさつだけどやっぱり女の子だな、さすがに異性に寝起きは見られたくないだろ

「とりあえず、顔洗って着替えて来い。飯作ってやるから」

律は無言でコクコクと頷きリビングから消えていった

「さて…オムレツとウインナー、聡！朝はいつもパンか？」

「そつだよ」

「了解だ」

パンをオーブンに入れつまみを回す、卵をとき、粉チーズ、隠し味にマヨネーズを少量入れフライパンで形を整えつつ丸めつつ一緒にウィンナーを焼く

「こんなもんか…」

オムレツとウィンナーを一緒に皿に載せ、オムレツ、ウィンナーにケチャップをかける。オーブンからパンを取り出し、冷蔵庫にあったバターと一緒に乗せ食卓に置く、付け合せの少量のサラダを沿えてオムレツも食卓に置くと律が下りてきた

「ナイスタイミングだ。できたぞ」

律を食卓に座らせ俺が反対側に座る

「クウの料理はいつでも美味しいな」

「そりゃ良かった」

律の感想を聞き聡がやっているゲームに目を向ける

「ありがとね」

「ん？何が？」

律に似合わない言葉が聞こえた

「聡と遊んでてくれて」

「気にすんなよ。俺にとつても弟みたいなものだ」

軽く言葉を交わし律が食べ終わったので冷えた麦茶を入れて律の前に置き食べ終わった食器を取り上げ洗っていく

「それにお前の意外な一面も見れたしな」

「な！ク、クウ！」

律は俺に顔を赤らめて俺に抗議する

「受け売りだけど…もっと自分に自信持てよ。女の子なんだからな」

洗い物を終え、律の頭をポンと叩き聡の下に向かいしばらくゲームをした後夕食の食材を買わなければいけないのでお暇させてもらう

「またな律、聡も」

「またね！兄ちゃん！」

「また部活でな、クウ」

俺は律の家を出て、スーパーに向かう

「んー何を食うかな…」

不意ながら今日から飯の一人暮らしが始まったので夕食の食材を吟味する

「あれ？空也さん？どうしたんですか？こんなところで」

憂ちゃんが話しかけてきた

「憂ちゃんか、久しぶりだね」

「お久しぶりです。でこんなところでどうしたんですか？」

「夕食の食材を買いに来たんだ」

「空也さん自分で作るんですか？」

「ああ、自分ひとりだけなんでどうしようかと悩んでたところだ」

憂ちゃんが少し考えたような表情を見せ、俺に提案してきた

「じゃあ私の家で一緒に食べませんか？お姉ちゃんも喜ぶと思いますし」

「それはありがたいが、親御さんに迷惑だろ」

「大丈夫です。今日は家に帰ってきませんから」

いや、それはそれで問題があると思うのだが…

「あっ！もちろん嫌ならいいです！」

慌てたように、そして残念そうな顔を見せる憂ちゃんを見て少し笑ってしまった

「わかった。じゃあご相伴にあずかるうか」

俺の言葉に憂ちゃんの顔がパツと明るくなった。二人で買い物をしあまり材料は買わなかったが、一度俺の家に寄り、クーラーボックスを担いで唯の家に向かう

「空也さんが家に来るの久しぶりですね」

「久しぶりというか、これでまだ二回目だけど？」

「それでもです」

帰り道で憂ちゃんは上機嫌だった。憂ちゃんとはメールを何度かしただけで顔をちゃんと合わせるのもまだ二回目だった

「さあ、どうぞ」

憂ちゃんがスリッパを用意して平沢家に上がる

「おかえり〜憂〜。あれ？クーくん？どうしたの？」

「スーパーで会ってね、一人で食べるみたいだったから招待したの」

「そうなんだ〜。クーくん憂の料理美味しいんだよ〜」

「お姉ちゃん…」

唯の言葉に憂ちゃんが照れていた

「憂ちゃん、俺も手伝うよ」

「いえいえ、大丈夫です！空也さんはお客さんですので待っていて下さい」

憂ちゃんは両手をブンブン振って断る

「ただご馳走になるだけじゃ悪いよ。でもってさすがに憂ちゃんにはこれはちょい厳しいだろ」

俺はクーラーボックスを開き、マグロの塊を見せた

「シンプルに刺身にしようと思ってな。これが天城家のやり方だ。」

「さすがクーくん！」

唯がマグロに目をキラキラさせていた

「そういうわけで憂ちゃん良いかな？」

「そういうことならどうぞ」

憂ちゃんの承諾を受け、持ってきたまな板にマグロを乗せる。そしてマイ包丁を取り出した

「よし！」

マグロの塊を手際よくカットしていく、憂ちゃんは味噌汁やサラダを作っていく。ある程度までカットすると短冊のように切っていくそれを皿の上に盛っていく

「よし、こんなもんだろ」

「こつちも出来ました」

食卓に料理を並べていき全員で食べる

「おいしーい！」

「そりゃ良かった」

同じ言葉を唇ごる言ったような気がするが気にしないでおう

「そついえば空也さんの包丁、細くて綺麗でしたね」

「よく見てるね憂ちゃん」

すつと俺の包丁をケースから取り出す。俺が小さい頃に親父に買ってもらったものであまり好感は持てない代物だ

「いいな〜そんな包丁が私も欲しいな〜」

「憂は本当に料理が好きだもんね〜」

憂ちゃんが羨ましそうな顔をし、唯はひたすらマグロを食べていた

「この包丁、憂ちゃんにあげるよ」

包丁をケースに入れて憂ちゃんに差し出す

「えっ！そんな悪いですよ！」

「今日招待してくれたお礼だ。それに俺はあまり料理をしないから、毎日料理する憂ちゃんの手にあつたほうがこの包丁も幸せだよ」

俺は笑いながら憂ちゃんの手に渡した

「ありがとうございます！大事にしますね！」

憂ちゃんが包丁を抱きしめ満面の笑みでこたえた

「いいな〜憂〜」

「唯にはまた今度な」

「約束だよクーくん！」

「はいはい」

包丁をもらった憂ちゃんは終始嬉しそうな顔をしながら夕食を食べ、
ていた

夕食を食べ終わると憂ちゃんが洗い物をしてくれていた

「唯、ギターもってこい。見てやる」

唯が頷き素直にギターを持ってくる

「クーくんここがわからないんだ〜」

唯が譜面を渡してくる

「ここはな…」

唯のギターを借り実演しながら教える

「空也さん、お姉ちゃん。お茶どうぞ」

「サンキユ、憂ちゃん」

憂ちゃんからお茶を受け取り、ひとまず休憩する

「さすがクーくんだね。私にわからないところすぐ分かっちゃうんだもん」

「分かる範囲で、だけどな」

「空也さんが分からない部分なんてあるんですか？」

「まあな」

お茶を飲みながら雑談を交わしていく

「でも唯は本当に飲み込みが早いな。教えがいがある」

「えっへん！」

「でもまだまだただけどな」

胸をはった唯がどんどんしぼんでいった。それからしばらく唯のギターを見て。遅くなっただけではないので早めにお暇させてもらう

「唯、また部活でな。憂、また今度な」

「今日はありがとうございました。おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

唯の家を出てしばらく歩く

「ん？ 溇か」

コンビニから溇が出てきた

「あ…空也…」

「よう、なにしてた？」

「ああ、ちょっとアイスを買いにな」

コンビニの袋を俺に見せ、並んで歩き出す

「あ、ちょうどいいのがあるぞ」

そういつてクーラーボックスの蓋を開く、まだ中は冷えていた

「じゃあ遠慮なく」

クーラーボックスに溇のアイスを入れて再び歩き出す

「空也はどこに行ってたんだ？」

「唯の家にご相伴を預かりにいった」

「え？」

「親父と母さんが仕事でアメリカに行つてな、今日から一人暮らしなんだ。」

それから唯の家に行った経緯を簡単に話した

「一年も一人暮らしで寂しくないのか？」

「なんとかなるさ。漣や軽音部の皆が居る。寂しくは無いさ」

漣の頭をポンポンと叩き笑顔をみせる

「そつだな」

漣が軽く笑った

「後、この事は他の人には言つなよ？お前に言ったのが初めてなんだからな」

「なんで私なんだ？」

「お前とは家が近いつていうのもあるが、なんとなくお前には言つときたかった」

「それって……」

「特に深い意味はねえよ。それよか早くしないとアイス溶けちゃう」

ぞ
」

「そ…そうだな」

澁が慌てて俺の横に並んで歩き出し、しばらくすると澁の家の前に着いた

「ほれ」

クーラーボックスから澁のアイスを取り出す

「ああ、ありがとな。そうだ一個空也にあげる」

コンビニの袋から一つアイスを取り出して俺に渡す

「サンキュ、じゃお休みな」

「ああ、おやすみ」

家に帰るとアイスを冷凍庫に入れ、軽くシャワーを浴びベットになった

第六話（後書き）

完全オリジナルです。アニメで合宿が終わると新学期が始まってたので入れてみました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8594z/>

けいおん! 俺の奏でる音

2011年12月30日02時52分発行